

「分析化学」誌の現状と改革



中 嶋 秀

分析化学誌は日本分析化学会が発足した1952年に第1巻が発刊され、今年で68年目を迎える月刊の学術論文誌です。私はその伝統ある分析化学誌の編集委員を2011年に仰せつかり、2018年からは編集理事の大役を拝命しました。理事就任と同時に論文の審査システムを大幅に改革しましたが、これまで大きなトラブルもなく毎月1回の発行を無事に続けてこられました。これもひとえに、渋川委員長をはじめとする編集委員各位ならびに皆様のご支援とご協力のおかげと感謝しております。さて、分析化学誌は第69巻(2020年)1号より年間の発行回数が8回となります。ここでは、その経緯について報告させていただきます。

近年、大学や公的研究機関に勤務する研究者に対する業績評価が一段と厳しくなり、研究成果をインパクトファクターの高い海外の学術論文誌に投稿しようとする研究者が増加しています。そのため、和文誌である分析化学誌への論文投稿数は年々減少し、分析化学誌は依頼論文により、かろうじて毎月1回発行できているような状況です。一方、長年の豊富な経験を有する日本分析化学会事務職員の皆様の協力なくして分析化学誌を毎月滞りなく発行することは不可能ですが、会員数の減少による経費削減のために事務職員数が削減され、編集担当事務職員の負担は大幅に増加しています。そのため、数年前から分析化学誌を「ぶんせき」誌と合併してはどうかという意見も寄せられていました。

そこで、分析化学誌編集委員会で、他の化学系学会の和文論文誌の発行状況を調査したところ、投稿数の減少は分析化学誌に限らず他の和文論文誌も同様で、他学会は既に学会論文誌を休刊あるいは隔月刊化していることが明らかになりました。そこで、編集委員全員に対して分析化学誌の隔月刊化についてアンケート調査を実施したところ、投稿数の減少や学会の財務状況を鑑みると隔月刊化はやむを得ないという意見が大多数でした。しかし、その一方で、下記のような隔月刊化に慎重な意見もいただきました。

- 企業や公設試験研究機関で分析業務に携わる技術者の中には、英語で論文を作成する経験が少ないために、和文誌である分析化学誌に論文の投稿を希望する技術者も多い。
- 分析化学の初心者にとって日本語の学術論文誌は大変ありがたく、学生が卒業論文執筆時に分析化学誌を参考にするなど、分析化学誌は教育面においても非常に重要な役割を担っている論文誌である。

このような意見を踏まえて編集委員会で慎重に審議した結果、分析化学誌は第69巻(2020年)1号より、年間の発行回数を8回とすることに決定しました。すなわち、1・2号：合併、3号：研究懇談会特集、4・5号：合併、6号：編集委員会特集、7・8号：合併、9号：研究懇談会特集、10・11号：合併、12号：討論会特集とし、特集号以外の合併号には、これまでどおり年間特集と若手初論文および一般投稿論文を掲載します。また、経費削減と事務作業効率化のために、Anal. Sci. 誌のシステムをベースとした新しいWeb投稿・審査システムを導入することを計画しています。これにより、より迅速な審査が可能になります。また、分析化学誌に論文を投稿することを希望していても、論文作成の経験が少なく、適切な指導を受けることが困難な会員の方のために、論文作成支援サービスを開始する予定です。さらに、これまでの分析化学論文賞と分析化学若手初論文賞に加え、企業や公設試験研究機関に勤務している会員の方のために、分析化学産業技術論文賞(仮称)を新たに創設する予定です。

以上のように、分析化学誌は第69巻より年間の発行回数が8回となりますが、掲載する論文の数と質はこれまでと変わりなく維持してまいりますので、引き続きご支援とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

[Hizuru NAKAJIMA, 首都大学東京大学院都市環境科学研究科, 「分析化学」編集理事]